

子育て世代の女性との“本気”で語ろう会 会議録

団体名	子育て世代の女性
日 時	令和6年6月7日（金）10時00分から11時50分まで
場 所	リナシティかのやコワーキングスペース（オープンスペース）
参加者	子育て世代の女性7名
	市長、子育て支援課職員、政策推進課職員

意見交換

- 1 出産や子育てに必要なこと
- 2 結婚や出産、子育てにおけるハードルについて
- 3 鹿屋市のまちづくりや子育て環境に求めること

【参加者からの主な意見】

1 出産や子育てに必要なこと

- 子どもを持ったことで多くの支援施設があることを知り、曜日によって行く場所もあり、孤独感を感じることはあまりない。いつでも行ける・いつでも会える場所があることに助けられている。
- あそ VIVA!かのやは、平日利用する際も予約が必要だが、平日の予約を無くし、いつでも気軽に行けるようになれば、利用しやすくなる。
- あそ VIVA!かのやの先生に子育てで不安に感じていることなどを相談したくて利用する方もいることから、温かい態度で迎え入れるようにしてほしい。
- あそ VIVA!かのやの遊具に年齢制限が設けられているが、遊んではいけない遊具のことを小さい子どもに理解させるのは難しい。いい施設であることから、初めから入れないようにするなど、利用しやすく、温かみのある利用方法を設定してほしい。
- 子どもが部活でいろいろな施設を利用するが、すごく充実していると思う。
- 鹿屋市では、子どもの医療費を1度支払う必要があり、2か月後に振り込まれるため、面倒くさく感じる。
- あそ VIVA!かのやは駐車場での車の間隔が狭いため、運動する方とあそ VIVA!かのやを利用する方の駐車場を離すことや3台駐車できるところを2台分にするなどしたら、もっと利用しやすくなる。
- エンジェルサウンズというお腹の赤ちゃんの心音を聞ける機械があるのことから、保健センターなどに設置し、自由に使用できるようにしてほしい。
- 保育施設に入りやすい環境を整えていただくことや現時点でどの施設が入れるのか目に見えて分かるようになれば、保育施設を探しやすい
- ミルクであれば、どのくらい飲んでいいのか分かるが、母乳の場合は、どのくらい母乳が出ているのか分からずに不安だったため、赤ちゃんの体重計があればいいなと思った。
- 医療費や給食費が無償となり、大変ありがたい。幼稚園や保育園が無償化されているが、家で子どもを見ている方にも何かしら補助があったらいいと思う。
- 高校にバスで通う生徒もいるため、バス代の補助がほしい。
- 子どもたちが思いっきりボール遊びをできる公園がほしい。

- 輝北は公共交通機関がなく、バスの便数も少ないことから、子どもの高校の選択肢が限られてしまう。公共交通機関がもう少し充実し、高校の選択肢が増えるようになってほしい。

《市長》

- あそ VIVA!かのやに心配事で来られる方もいることから、職員のスキルアップ・接遇の向上を図らなければいけない。
- 医療費に関して、住んでいる市町村ごとに差があることはよくない。経済的な負担の解消はしなければならないが、財源確保も必要なことであり、お金の使い方として、今回の機会などを通じて皆さんの意見を伺い、どこにウエイトを置くのか考えていかなければならない。
- 鹿屋市は、待機児童はいないが空き待ちの方がいる。保育施設の意向もあると思うが、皆さんが保育施設を調べる際に施設ごとの空き状況が分かるようにホームページ上で公開するなど、検討する。
- あそ VIVA!かのやの駐車場は、課題だと感じていた。あそ VIVA!かのやの利用者を含めていろいろな方から意見を聴き、何がいい方法がないのか、検討していきたい。
- エンジェルサウンズに関しては、お腹の赤ちゃんの心音を聞きたい気持ちは理解できる。健康増進課に保健師や助産師がいることから、利用状況やコスト、安全性など、実態を含めて情報収集を図っていきたい。
- 異次元の子育て支援として、児童手当が高校生まで拡大されるが、財源は高齢者の医療費に上乗せされるなど、支援があれば、どこかに負担が来る。
- 今は、介護保険料などの社会保険料が高く、負担が大きいと思う。そのような中で、日本全体が最後のチャンスだと、子育てに力を入れ、支援を充実させるなど頑張っている。支援を厚くすることで子どもが増えるのかなど、効果が分かりにくいけど、できる支援はしっかり行っていきたい。
- 通学における公共交通には、問題意識を持っている。議論の中心にあるべきは、生徒の通学時の安全安心であり、そこに注目すれば、スクールバスもいいと思うが、市がスクールバスを運行することで、民間のバスを利用する生徒がいなくなり、民間は赤字になってしまい、更に路線廃止や便数の減につながってしまう。
- 免許返納をすることで活動範囲が狭くなることから、公共の足の確保は大事である。輝北や花岡、吾平にてデマンド交通の運行や福祉施設と一緒に買い物支援のバスを出すなど取り組んでいるが、交通手段の確保は喫緊の課題だと認識している。

2 結婚や出産、子育てにおけるハードルについて

- 今は、子どもが1人だが、可哀そうだと思うので、もう少ししたら2人目をと考えている。何かがないから出産できないというより、出産した後の金銭面の手出しが多く、少し考えるところがあった。
- 仮に2人目を妊娠した際に悪阻の中、ヤンチャな娘の面倒を見れるのかが不安

- である。幼稚園に通園するようになってから、2人目を産もうかと考えている。
- 若い時は子どもが苦手だったが、自分の子どもを育てていく中で面白いと思えるようになった。
 - 子どもの夜泣きが大変であり、相談したくても、みんな家庭を持っており、友達に迷惑をかけることもできず、どこに行くとかでもなくドライブをしていた。夜に利用できる施設があればいいなと思うことがあった。
 - 今は、産休があり、育児休業が貰えるなど、昔と比べると恵まれているのかなと思うが、逆に気持ち的な部分では大変な思いをしているんだろうと感じる。子育てをもう少し、楽しく感じることであればいいのと思う。
 - 今は家にいても何でもできるため、マッチングアプリも、出会いのきっかけ作りにはいいのではないか。
 - マッチングアプリは、面識のない人と連絡を取り合い、1対1で会うことを怖いと言う方もいる。
 - 自分に自信がある方は、出会いもあると考えることから、自信が持てない人向けのサロンがあってもいいのではないか。
 - 今の方は、結婚や子育てのハードルを勝手に上げており、そこまで難しく考えなくてもいいのではないかと思う。鹿屋市での出会いは難しいので、県外から呼んでくる方がいいのではないか。
 - 運動をしている若い方も多いため、チョコザップのような施設も出会いのきっかけになるのではないか。

《市長》

- 最近の若者が結婚や子育てにハードルを上げすぎているのではないかと思う。世間が経済的な問題で結婚できない、子どもを産めないと声高に言うことともあり、自分にプレッシャーを掛けているのではないか。
- さまざまな理由で2人目以降の出産をためらうが、経済的な支援だけでなく、純粋に兄弟は多い方がいいなど、理屈では言えない部分もあるのだと思う。
- 子育ては、親や地域の応援がないと難しいのかなと思う。
- マッチングアプリで出会って結婚する方が、4組に1組いるようである。出会いの場を作るためにアウトドアミーティングを開催しているが、なかなか結婚まで結びついていない。
- 20代～30代の方を保育園等に連れて行くことで、子どもはいいなと思うかもしれない。小さい子どもがいる母親の大変さ、母親になった喜びなど、子育ては大変だけど楽しいというような話を聞くことで、出産・子育てに関する考え方が変わる方もいると思う。
- 今の若い方は、教育やキャリアを優先することで、結婚や子育てが後回しになってしまったということもあると思う。
- 人付き合いが怖いという感覚は、今の時代では仕方ないことではないか。コミュニケーションを取りづらくなってきていると感じる。
- 今はマッチングアプリが出会いにおける有力なツールとなっている。
- 日本は、子どもがいるということは、結婚していることが前提になってしまっ

ている。子どもを増やすためには婚姻数を増やすことなんだろうと思う。

- 若い方は休みの日に何をしているのだろうか。リナシティでもイベントをよく開催しているが、鹿児島県はイベントの時にアルコールがセットになっているため、キッズフェスタのように年齢層にあわせた、若い人向けのイベントが必要だと感じる。

3 鹿屋市のまちづくりや子育て環境に求めること

- イオンのような店舗があったらいいなと思う。
- 保育施設は充実しているが、保育士が不足している中で、配置基準等があり、定員に達していなくても子どもを入れることが出来ていない。保育士は低賃金のイメージがあるため、そのイメージをどうにかできればと思う。
- 下の子が1歳になったら働きたいと考えているが、仕事を探す際に子どもの発熱や病気をしたときに休む必要があるため、誰かが休む際は職員間で協力し合うなど、子育てしながら働きやすい会社はどこなのだろうかと思う。
- TSMCが進出してきたが、まち自体が変わってきており、インターナショナルスクールができ、地価も4倍ほどになっているようである。企業が立地し、人口が増えることで、出会いが増え、結婚や子どもの増加に繋がればいいなと思う。
- 輝北は病院が少なく、鹿屋の小児科に行くにしても30分～40分ほど掛かってしまうため、心配で地域から出て行ってしまうため、人が留まらない理由ではないか。

《市長》

- シャトレゼの工場が11月頃に田崎に建設され、鹿屋から全国にお菓子が届けられる。イオンやラウンドワンのような施設は、商圈が大きくなければならないが、出来る限り誘致を進めなければならないと考えている。
- 保育士という職業は、大事な職業であることから、選ばれる職業となるように処遇改善をしなければならない。国が配置基準を定めることや無償化を行う中で、待遇だけでなく目に見えない時間外勤務などを改善するなど、業界が一体となって取り組まなければならない。保育士は、保育園以外の児童発達支援事業所等からの需要も多いと聴く。
- 企業の求人票にPR項目や自由意見欄だけでなく、子育て世代の応援項目欄があってもいいのではないか。
- 去年の鹿屋における人口は、高齢者が1,500人亡くなる中で出生が800人であり、700人程度の差が生じている。また、就職や進学で県外に転出するため、1,100人の人口減少となっている。
- 高校3年生が進学・就職の際、進学ではほとんどの方が市外に出て、就職においても8割強が市外に出ていくため、鹿屋には2割弱しか残らない。子どもたちが働きたくなるような良質な雇用の方が大事になる。給料やステータスなど、子ども達に夢や希望、自信を与える企業が必要であるため、これからもそのような企業誘致を目指して取り組んでいく。
- 鹿屋には小児科は結構あり、産婦人科も3施設、総合病院もあり充実している

と思うが、診療科目によっては、眼科や耳鼻咽喉科が少ないという声がある。医療や文教は必要なインフラであるが、施設数が減っていることや医者が確保できないことなどの問題はある。

○10年前は大隅半島の人口の43%が鹿屋市に住んでいたが、現在は45%ほどとなっており、鹿屋市の比重が高まっている。大隅半島の中で鹿屋市が医療や教育など、しっかり努力をして機関の確保に努めなければならないと考えている。